



学全集 3

スタンダード
赤 と 黒

桑原武夫 生島遼一 訳

河出書房新社

世界文学全集 3 スタンダード



© 1959

編集委員

阿部知二 伊藤 整
桑原武夫 手塚富雄
中島健蔵

昭和34年10月25日初版発行

昭和34年11月25日三版発行

定価 290円

訳者	桑原武夫
	生島遼一
発行者	河出孝雄
印刷者	草刈親雄
装幀	原弘

印刷製本：中央精版印刷株式会社

本文用紙：三菱製紙株式会社

同納入：株式会社柏原洋紙店

クローズ：東洋クローズ株式会社

同納入：株式会社石綿商店

発行所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社
神田小川町三の八

電話東京(29)3721~7

振替口座東京10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

出版者より……………三

第一部

第一章 小都会……………	四	第十二章 旅行……………	六六
第二章 町長……………	七	第十三章 透かしの靴下……………	七四
第三章 貧しいものの幸福……………	一〇	第十四章 イギリス鉄……………	七九
第四章 父と子……………	一五	第十五章 鶏鳴……………	八三
第五章 交渉……………	一八	第十六章 あくる日……………	八七
第六章 倦怠……………	二六	第十七章 首席助役……………	九一
第七章 親和力……………	三三	第十八章 ヴェリエールにおける国王……………	九六
第八章 小事件……………	四四	第十九章 考えは苦しませる……………	一〇八
第九章 田園の一夜……………	五三	第二十章 匿名の手紙……………	一一八
第十章 大きな心と小さな富……………	六〇	第二十一章 主人との対話……………	一二三
第十一章 ある晩……………	六三	第二十二章 一八三〇年の行動法……………	一三七

第二部

第二十三章	公吏の悩み……………	一五	第二十七章	人生の初経験……………	一九一
第二十四章	首都……………	一六	第二十八章	聖靈発出……………	一九五
第二十五章	神学校……………	一七	第二十九章	最初の昇進……………	二〇三
第二十六章	世間 または 金のある人の 知らないもの……………	一八	第三十章	野心をもつ男……………	二八
第一章	田園の楽しみ……………	二七	第十二章	ダントンになるか……………	三一
第二章	上流社会へ……………	二八	第十三章	たくらみ……………	三七
第三章	第一歩……………	三五	第十四章	少女の考え……………	三六
第四章	ラ・モール邸……………	三五	第十五章	たくらみか……………	三四
第五章	感受性と敬虔なる貴婦人……………	三七	第十六章	午前一時……………	四八
第六章	言葉つかい……………	三四	第十七章	古 剣……………	五四
第七章	神経痛の発作……………	二八	第十八章	苦しい時……………	五九
第八章	どの勲章が人目をひくか……………	二九	第十九章	滑稽歌劇……………	五五
第九章	舞踏会……………	二九	第二十章	日本の花瓶……………	七四
第十章	女王マルグリット……………	三八	第二十一章	密 書……………	八〇
第十一章	少女の勢力……………	三七	第二十二章	討 論……………	八五

第二十三章	僧侶・山林・自由……………	三九三	第三十五章	あらし……………	四五九
第二十四章	ストラスブル……………	四〇三	第三十六章	悲しきことども……………	四六五
第二十五章	道徳稼業……………	四〇八	第三十七章	天守閣……………	四七三
第二十六章	道徳的恋愛……………	四一六	第三十八章	権勢の人……………	四七六
第二十七章	教会における最上の地位……………	四一九	第三十九章	画 策……………	四八三
第二十八章	マノン・レスコー……………	四二三	第四十章	平 静……………	四八七
第二十九章	たいくつ……………	四三七	第四十一章	公 判……………	四九二
第三十章	歌劇の棧敷……………	四三〇	第四十二章	……………	四九八
第三十一章	敵を恐怖せしめること……………	四三五	第四十三章	……………	五〇四
第三十二章	虎……………	四四〇	第四十四章	……………	五〇九
第三十三章	弱気地獄……………	四四六	第四十五章	……………	五一六
第三十四章	機知の人……………	四五三			
訳 注……………		五三四			
年 譜……………		五三三			
解 説……………		五三七			
			(訳 者)		

赤

と

黒

——一八三〇年代記*——

真実、おそるべき真実。

ダントン

主要人物

ジュリアン・ソレル この小説の主人公。貧しい木挽き職人の子、生来の美貌と才知をもって、上流階級と富豪に挑み、強烈な自我と魂の誠実のため、ついに断頭台の露と消える。

レナール ヴェリエールの町長。

レナール夫人 レナール氏の夫人、ジュリアンを知り、愛情と信仰のジレンマにもたえる。

エリザ レナール家の小間使。

デルヴィール夫人 レナール夫人の従姉妹。

ピラール師 ブザンソン神学校の校長。

ド・ラ・モール侯爵 パリの大貴族、ジュリアンを秘書に雇う。

マチルド ド・ラ・モールの美しい令嬢、ジュリアンの子をやどす。

出版者より

この作品がまさに発表されようとしたとき、あの七月の大事件*が勃発して、すべての人々の頭を空想的なたのしみにはほとんどふさわしからぬ方向にむけてしまった。われわれはこの原稿が一八二七年に書かれたものであると信ずる理由がある。

第一部

第一章 小都会

いまのよりましな連中を
数千いっしょに入れてみたところで、
籠は陰気になるばかりだ。

ホップス

ヴェリエールの小さな町はフランシェーコンテのもっとも美しい町の一つにかぞえることができる。赤瓦の、とがった屋根の白い家々が丘の斜面にひろがっていて、そこへ勢よく成長したくりの木の茂みが、丘のごくわずかな起伏までもくつきり描き出している。ドゥー川が、昔スペイン人に築かれ今はもう廃墟になった、町の城壁の下数百尺（一尺は〇・三メートル）ばかりのところを流れている。

ヴェリエールは、北方を高い山でかこまれているが、それはジュラ山脈の一支脈である。のこぎりの歯のよう

なヴェラ山のいただきは十月はじめて寒さの来るころから雪におおわれる。山からほとぼしる急流は、ドゥー川へ落ちるまでにヴェリエールの町をつらぬいて、多くの製板小屋に動力をあたえる。きわめて簡単な工業だが、これが市民などというよりも、むしろ百姓に近いこの住民の大多数の生活を、幾分らくにしているのだ。しかし、この町をゆたかにしたのは製板小屋ではない。ナポレオン没落後、ヴェリエールのほとんどすべての家の表構えが改築されたといわれるくらい、一般に暮らしがらくになったのは、ミユルーズ出来と称するまがいのさらさら製造のおかげである。

この町へ一歩ふみこむと人々は、恐ろしいかっこうをした騒々しい機械のひびきに、どきもぬかれるだろう。急流の水が動かす車輪の力によって持ち上げられた数十の重い鉄鎚が、道のしき石を踊らせるほどの地ひびきを立てて落下する。この鉄鎚の一つ一つが毎日何千と数えきれぬくらい釘を造り出すのだ。いきいきしたかわいい娘たちが、この巨大な鉄鎚の打つ下へ鉄片をさし出すと、それがたちまち釘に変わる。一見いかにも荒っぽいこの仕事は、エルヴェシ（スイス）とフランスをわかつこの山間へ、はじめて足をふみ入れた旅客をもっとも驚かすものの一つである。大通りを上ってゆく人々の耳を

つんぽにするこのりっぱな製釘工場はだれのものかと、ヴェリエールへやってきた旅客がきくと、土地の人はまだるっこい調子で答える——「ありや町長さんのもんでさあ」

ドゥー川の岸から丘のいたきまで上るこのヴェリエールの大通りで、旅客がほんのしばらくでも足を休めていると、きつと一人のいそがしげな、尊大なふうをした大男が現われるのを見かけるにちがいない。

その男の姿を見ると、皆がすばやく帽子をぬぐ。ごま塩頭で、ねずみの服をきている。彼は数個の勲章の偏用者^{ばいよう}なのだ。額がひろく、わし鼻だが、全体として一種ととのった容貌^{ようぼう}をしている。だから一見したところ、町長らしい貫録^{かんろく}とともに、五十近くの人にも見かける、あの一種の愛敬^{あいけい}をさえたたえていると思うかもしれない。だがバリの旅客はすぐに、なんとなくあさはかな機転^{きてん}のきかぬ一種の自己満足と、うぬぼれの態度が不愉快になつてくるだろう。けつきよく、この男の才能は貸した金はじつにが、つちり支払わせるが、借りた金はできるだけおそく支払うということだけだということがわかる。

ヴェリエール町長レナル氏とは、こういう人物だ。彼は重々しい足どりで道を横切つて町役場にはいり、旅客の目から消えてしまう。が、旅客がさらに散歩をつづ

けて、道を百歩ばかり上つてゆくと、外観のかなりきれいな邸宅と、家にそうた鉄さくごしにりっぱな庭園が目につくにちがいない。その向こうには、ブルゴーニユをかこむ丘陵にかぎられた地平線がなめられるが、それは目の保養にあつらえ向きにできたようだ。この眺望^{ていぼう}は旅客に、つまらぬ金銭問題の悪臭^{あくにお}紛々^{かんぶん}たるあたりのふんいきをしばし忘れさせてくれる。彼はもうそろそろこの不愉快なふんいきのために息苦しくなりかけているころなのだ。

旅客はこの家がレナル氏のものだと教えられる。ヴェリエール町長が、こんなりっぱな切り石造りのすまいを近ごろ新築したのも、彼があの大製釘工場から得たものけのおかげだ。ひとのいうところによると、彼の家はスペイン系の旧家で、ルイ十四世の征服よりずっと昔からこの地方に定住していたらしい。

一八一五年以来、彼は工業家たることを恥として、一八一五年にヴェリエールの町長になつたからだ。幾段ものテラスになつてドゥー川の岸まで下つている、この宏大な庭園のあちこちをささえる石垣も、鉄の取引^{とりひき}きのほうでレナル氏がうまくやったおかげでできたものなのだ。

ライプチヒ、フランクフルト、ニュールンベルクな

ど、ドイツの工業都市をめぐるあの絵のように美しい庭園を、フランスに求めてはいけない。フランシェーコンテでは、石垣をたくさんつくればつくるだけ、また積み重ねた石で自分の地所をふさげばふさぐだけ、それだけ多くの尊敬を隣人に要求してもよい、ということになっている。石垣だらけのレナール氏の庭園も、彼がいくつかの小さな地所を金にあかして買い占め、その上に造ったものだというので、いっそう評判が高いのだ。たとえばヴェリエールの町へはいつてきたとき、ドゥー川の岸近く奇妙な場所にあるので、きつと諸君の目をひいた製板小屋——『ソレル』という名が、屋根の上ののっかった看板に、でかい字で書かれているのに諸君は気がつかれただらう——あの製板小屋にしても、六年前までは、今レナール氏の庭の四番目のテラスの石垣が築かれていた場所を占めていたのである。

いつもの傲慢ごうまんさにも、町長さんはいじわるで頑固がんこな田舎者の老ソレルを向こうにまわすと、いろいろとかげひきをしなければならなかった。その小屋をよそへ移すことを承知させるためには、ルイ金貨をどっさりやらねばならなかった。製板小屋の動力のもとになる公用河川のほうは、パリでの自分の勢力を利用して、それを迂回させる許可をやつと得た。この恩典は一八二*年の総

選挙後、彼にあたえられたのだ。

彼はソレルに、五百歩ばかり下流のドゥー川の岸に、一アルパンに対して四アルパンの割で土地をやった。そしてこの位置は、み板の取引には、ずつと有利だったのに、ソレル老——彼が金をこしらえてから皆がそう呼ぶようになったのだが——は、隣人が焦燥と土地所有欲にかられているところへうまくつけこんで、六千フランの金をうまうまとまきあげた。

この協定が土地の利口な人々の非難的まじとなつたのはほんとうだ。かつて、それは今から四年前のある日曜のことである、町長の制服を着用して御堂から帰るときにレナール氏は、三人のむすこにとりまかれた老ソレルが自分を見てにやにや笑っているのを遠くから見かけた。このにやにや笑いが町長さんにはっきり不覚をさとらせしたが、もうおせい。もつと有利に交換できたものをと、この時以来レナール氏はそのことばかり考えている。

ヴェリエールでみんなから尊敬されようと思つたら、石垣をたくさんつくることも必要だが、それと同時にパリへ出かけるために春のころジュラの山路を越えてくる石工が、イタリヤからもつてくる設計をけつして採用しないことである。万が一そんな新しがりをししようものなら、その向こう見ずの普請しんせう気がいは一生おつちよこち

よいの折り紙をつけられて、フランシエーコンテの世評を左右するあの賢明着実な連中から永久に見放されてしまふ。

事実、この賢明な連中がこの土地でじつに不愉快な専制政治をしている。パリとよばれるあの大共和国で生活したものが小都会の暮らしがやりきれないのは、この不愉快な言葉のためである。世論の専横は、(しかも何という世論か!) フランスの小都会においても、アメリカ合衆国においても、同様に愚劣なことだ。

第二章 町 長

権力! そんなものはつまらぬものじやありませんか。愚者の尊敬、小児の感嘆、富者の羨望、賢者の侮蔑。

バルナーヴ*

レナール氏が運よく、行政官としての名声をあげたのは、ドゥーの流れから百尺ばかりの高さで、例の丘のすそをからむ散歩道に大きな石垣が必要になったためである。ここは絶好の位置を占めていて、ながめはフランス

でもっとも美しいものの一つだが、惜しいことに毎年春になると雨が道の上にあふれて、雨溝がほれ、歩けなくなってしまう。この不便を皆が痛感するようになった結果、レナール氏がぜひとも、高さ二十尺、長さ三、四十間(一間は約一・)の石垣をつくらねばならぬことになって、それが彼の治政を不朽にしたというわけだ。

この石垣の胸壁——前々内務大臣がヴェリエールの散歩道の計画に絶対反対を表明したので、レナール氏はこの問題のためにパリへ三回も出むかねばならなかったが、その石垣の胸壁も今ではちゃんと地上四尺の高さにできあがっている。おまけにこのごろは、現任前任すべでの大臣連をばかにするように、切り石をはって裝飾まですしているのだ。

前の夜あそんできたパリの舞踏会のことを思い浮かべつつ、青みがかった美しい灰色の大石材によりかかって、私は幾度ドゥーの谷に目をそそいだことだろう! かなた、左岸には五つ六つの折れ曲がった枝谷があり、その底にはささやかな水流がごくはつきりと見わけられる。それが滝また滝と奔流して、ドゥー川に落ちてゆく。この山間では陽は焼けつくようだ。陽が頭上から照りつけるとき、このテラスで旅人の夢想をまもるものは、みごとに成長したプラタナスの木ばかりである。こ

の木のみやかな成長と、青みがかったその美しい緑は、町長さんが市会の反対を押しきって、散歩道の幅を六尺以上も拡張した結果、あの大きな石垣の向こうにくらせた埋立地のおかげなのだ（彼はウルトラ（極右党）で、私は自由主義者だが、このことに関しては私は彼に賛辞を呈するものだ）。そしてこのために彼やヴェリエール貧民收容所の良所長ヴァルノ氏は、このテラスがサニージェルマン・アン・レのそれに匹敵するという意見をいっているのである。

私の考えでは、この *Cours de la fidéité*（忠誠散歩道）——この公式名称を大理石板にほりつけたところが、二十か所たらずある。そしてそのおかげでレナール氏は、勲章をまたも一つもうけたのだ——について非難すべき点は、たった一つしかない。私が非難したいのは、あの勢いのいいプラタヌスをざりざりいっばい刈りこませる当局の野蛮なやり口だ。木の頭を低く、まるく平らに刈りこんで、ごくありふれた野菜か何かのようなかっこうにしてしまわないで、イギリスで見かけるようなりっぱな姿に成長させてやるのが一ばんいいのだが。しかし町長さんの意志は圧倒的だ。町有のあらゆる樹木は年に二回、情けようしゃもなく枝をはらわれる。土地の自由党の連中は、助任司祭マスロン師が刈りこんだ枝

葉を自分のものにする習慣になって以来、お上の植木屋の鉄の入れたがいっそうひどくなったというが、それは邪推というものだろう。

このマスロンという若い僧侶は、シェラン師および付近の数人の司祭連の目付役として、数年前ブザンソンから派遣されたのだ。ヴェリエールに隠退していた、イタリア侵入軍の一老軍医正——町長の説によると、彼は生前ジャコバン（急進派）で同時にナポレオン党だった——が、かつてこの美しい樹木の定期的な乱暴な刈りこみについて、町長に苦情をいったことがある。

「わたしは影をたいせつにしたい」とレナール氏はレジヨン・ドヌール着用者に向かって語るのにふさわしい威厳をもった口調で答えた。「わたしは影をたいせつにしたい。美しい影をつくるために、わたしの木を刈りこませるのです。それに、樹木というものには、そのほかに用途があるとは思われません。あの有利なる木のみに、いい収入にならないかぎりは」

「収入になる」——これこそヴェリエールにおいて万事を決定する重大な言葉である。そしてまたこれだけの言葉によって、いつも大多数の住民の脳裏にあることが言いつくされているのだ。

「収入になる」——この言葉が、諸君の目にはあんなに

美しく映じたこの小都会において、万事を決定する規準となるのだ。町をめぐるさわやかな深い谷々の美に心をひかれてくる他国のひとは、最初この町の住民は「美」に対する感受性に富んでいると思う。事実彼らは自分たちの国の美しさをしょっちゅう口にしてはいるのだし、彼らがその美しさを大いに尊重していることは否定できない。だが、それはこの風景美が、他国の人々を引きつけて、その落とす金で宿屋がもうけ、またそれが入市税というからくりで町に収益をもたらすからにほかならない。

朗らかな秋の日、レナール氏は妻に腕をかして「忠誠散歩道」を散歩していた。重々しい夫の言葉に耳をかしながら、レナール夫人の目は、たえず気づかわしげに三人の男の子の挙動にそそがれていた。十一ぐらいに見える一ばん上の子はともすると胸壁に近づいて、登りたそうな顔をする。するとアドルフという名がやさしい声で呼ばれるので、子供はその野心的な企てを断念するのだ。レナール夫人は三十ぐらいに見えるが、まだなかなか美しい。

「きつと後悔することだろう。あのバリっ子の先生は」とレナール氏は、ふだんよりずっと青い顔をして腹だたしげにいった。「おれには王様の側近に知り合いがない

わけじゃなし……」

しかし、これから二百ページにわたって田舎の話しようと思っている私ではあるが、冗漫な田舎の対話と、そのいわゆる巧みなやりとりを書きつらねて、諸君を悩ますような野暮なまねはよしたいと思う。

ヴェリエール町長にそんなにきらわれたバリの紳士というのは、アペール氏にほかならない。二日前にこの男は牢獄やヴェリエール貧民収容所ばかりか、町長そのほか土地のおもだった地主たちによって無報酬で経営されている慈善病院の内部にまで、うまうまとはいりこんだのである。

「だって」とレナール夫人はおずおずいった。「そのバリの方が、いったいどんなあなたの迷惑になることをしたりできますの？　だって、あなたは誠心誠意、貧しい人々のために計っていらっしゃるんですもの」

「あいつはただ悪口を言いふらしにやっ来て来たんだ。いずれ自由主義の新聞にいろんな記事をのせるんだらう」「そんな新聞、あなたは一度もお読みにならないじゃないの」

「だがひとの口からそういうジャコバン（急進派）の記事のうわさがわれわれの耳にはいつてくる。すると、そういうことが、こちらの心を乱して、われわれがよいこ

と、を、する、さ、ま、た、げ、に、なる、んだ(注)。このわしは司祭のや
つたことをけつして許さないぞ」

(注) 実話である！

第三章 貧しいものの幸福

徳高く策を弄(うづ)することなき司祭は、村
にとつて神といふべきである。

フリューリ

このヴェリエールの司祭は、八十歳の老人だが清浄な
山の空気のおかげで、鉄のような健康と性格をもつてい
た。この人には牢獄、慈善病院、また貧民収容所でさ
え、好きなときにいつでも視察できる特権があった、と
いうことをまず知っておかねばならない。パリから司祭
に紹介されてきたアペール氏は、手ぎわよく朝の正六時
というのにこの不思議な町にやってきて、さっそくその
足で司祭の宅をたずねたのだった。

貴族院議員で、この地方一ばんの大地主のラ・モール
侯爵の紹介状に目を通しながら、シエラン師は考えこん
でいた。

「わしは年もとつてゐるし、土地の人にも好かれてい
る」とやがて彼はつぶやいた。「あの連中もめつたなま
ねはしないだろう！」すぐにパリの紳士のほうへ向きな
おつて、この年にもにず、多少の危険をおかしてりつぱ
な行為をやるうとする喜びに、目をはげしくかがやかし
ながら、

「さあ、わしといつしよに來なざるがよい。しかし、典
獄やことに貧民収容所の監視人のまえでは、あたりのも
のについて、いっさい批評がましいことをいわぬように
していただきたい」

アペール氏は相手がりっぱな人物であることを知っ
た。この尊敬すべき司祭のあとについて、彼は牢獄、慈
善病院、収容所を訪れ、いろいろ質問を試みたが、あや
しげな答弁に接しても、少しも非難がましい言葉をはこ
うとはしなかつた。

この視察は数時間かかった。司祭は彼を昼食に招いた
が、アペール氏は手紙を書かなければならぬからといっ
てことわつた。彼はこのしんせつな人に、これ以上めい
わくをかけたくなかつたのだ。三時ごろ二人は貧民収容
所の視察をおわつて牢獄へもどつて來た。そこには背丈
が六尺もある、がにまたの巨人のような典獄が門の前に
立ちはだかつていた。卑しい顔つきが恐怖のためにとて

も醜みにくかった。

「ああ、もし！」と彼は司祭の顔を見るとすぐいった。

「そこにあなたとごいっしょの方はアペールさんじゃございませんか」

「それで？」

「じつは昨日から致命めいじつされておりますので。知事さんのお使いの憲兵が夜中馬を飛ばせてやってきて、アペール氏を牢獄の中へ入れてはならぬという命令がございまして」

「いかにも、ノワルーさん、わしといっしょの旅のお方はアペールさんにちがいない。だが、あなたはわしが夜でも昼でも好きなときに好きな人をつれて、牢獄へはいることができる特権をもっていることはご承知だろうか」

「承知しております、司祭さま」と典獄は、棒でたたかれるのがこわさに言うことをきくブルドッグのように、頭をたれて低い声でいった。「ただ、司祭さま、わたしには妻子があるのでございます。万一このことが上申されたら首にされてしまいます。この職のほかには生活の道がありません」

「職を失ってこまるのは、わしとでも同じことです」としだいに激しい口調で、良司祭が答えた。

「たいへんなちがいがい！」と典獄は激しく答えた。「あなたは、司祭さま、だれでも知っております。八百フランの年収があり、りっぱな不動産があり……」

こういう事実が、じつにさまざまに曲解され、誇張されて、二日前から小都市ヴェリエールに、あらゆる悪感情の渦うずを巻かせていた。それはげんに今も、レナル氏とその妻の間に起った小競合せうけいごうの種になっていたので。その日の朝、彼は、貧民収容所長ヴァルノ氏を伴って、司祭の宅へ行って、もつとも激しい不満の意を表明してきたのだった。だれ一人として後ろだてをもたぬシェラン師には、彼らの言葉のもつ効果がはっきりと感ぜられた。

「よろしい！ それじゃわしは、八十の年にもなつて、このあたりでやめられる三人目の司祭になるというわけですな。この土地へきてから五十六年、町のひとはみんなわしが洗礼してあげた——この町もわしのきたころは、ただ大きい村というのにすぎなかったが。毎日わしは若い人たちの結婚式をやっているが、その人たちのお祖父さんおじいさんも昔わしが結婚させたのだ。ヴェリエールはわたしには、家族のように思えるが、それと別れるのがこわさに、良心をまげたり、良心に背くようなふるまいはしたくない。あの客人に会ったときも、わしはこう思った